
ある少女の眼球

からなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少女の眼球

【Nコード】

N6867F

【作者名】

からなし

【あらすじ】

少女は闇の森をひたすら歩く。罪を背負う彼女の、終わることのない旅。

盲目の少女は歩いていった。

自分の足下に在るものには興味も抱かず、立ち塞がる大きな物体に行く手を阻まれ、傷を負ってから進行方向を曲げる。

裸足の裏はもう痛みを感じなかった。今までにその小さな足で何を踏み潰していようと「例えば花、或いは虫、若しくは子猫」それは彼女には関係のないことだ。

自分にある無数の傷を認知するにはその痛みを感じ取る他に方法はない。

手当をする手段が見えない。

2

その暖かさをもって朝を知る。

その暖かさを失って夜を知る。

少女は時に雨を感じた。小さく無数に当たる圧力、湿った匂い、優しい音。それらは彼女に語りかけた。

その全てを彼女は拒絶した。

ある日少女はざらついた背の高いものにぶつかった。前に出した右足に痛みを覚えたが気にはしない。右手を前につきだしてそれに触れた。最初は指先でつつくように、次第に手のひらで撫でるように。それは樹の幹のようであった。右手で触れながら周りを一周する。

それはとても太いようで、一回りするのにはしばらくかかった。

少女は前へ進む。しかしそこは森の中らしく、3歩ごとに樹に当たり、傷を負う。

それでも少女は前へ進む。

少女の眼に映るものは全くの闇で、瞼は眼球を護る意外に意味を持たなかった。

闇の満ちる世界の中で、少女は確かに存在する何かに突き当たり、戸惑う。手を伸ばせばそこに在るものを、彼女の視力とはとらえることが出来ない。

光に未練はない。在るのは私の存在だけでいい。

長い間森は続いた。

少女は歩む速度をおとさず、ただ前を向いて進む。樹に当たれば曲がる。また当たって曲がる。時たま聴こえる梟の鳴き声、リスが足下を通る感触、そして猛獣の唸り。それら全てを少女は無視した。

綺麗な光も、汚い真実も、全部意味を持たない。何故なら希望などないからだ。

少女は孤独を知らない。

（否、忘れているだけだ。）

それは彼女にとってこれ以上ないほどの幸福だった。

（本当は寂しくて死にそうなのに？）

闇を愛して光を憎む。

（嫉妬を孕んで。）

少女はそれを望んでいる。

（ならば何故歩き続けるのだ。）

少女の傷が星の数になった時、彼女は一体の死体に出会った。触れてみるとそれは硬く、冷たさをもって少女に挨拶をする。

（久しぶりだね。お嬢さん。）

森の中、盲目の少女と一体の死体。少女は死体の顔の辺りに手を伸ばし、その眼球に触れる。

何故なら傷つきたいから。

(どろして?)

思い出さなければならぬから。

(何を?)

在るべきものの、

(存在を?)

綺麗な光も、汚い真実も。

少女は忘れていたのだ。光を。そして本当の闇を。かつてその瞳で見たものを思い出すことを恐れるあまり、少女の眼球は機能を停止

し、彼女を偽りの闇へといざなつた。記憶だけを光に残して。

(許されることがないならいつそ)

眼球だけが覚えていたのは、残酷な事実と消せない罪。その小さな背中には背負いきれない大きな罪。

それは傷だらけの闇の旅をもって償われるべきである。

森の中、一体の死体と小さな少女。

死体が腐るにはまだ早い。

(後書き)

数年前の作品です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867f/>

ある少女の眼球

2010年11月29日22時53分発行